

⑤ 南海トラフ地震の津波シミュレーション結果から見た瀬戸内海 の海釜形成の要因

鈴木充広^{*1}，宗田幸次^{*2}，石川美風香^{*1}，佐藤 敏^{*3}

*1 海洋調査課 海洋防災調査室，*2 技術・国際課 海洋研究室，*3 海洋情報課

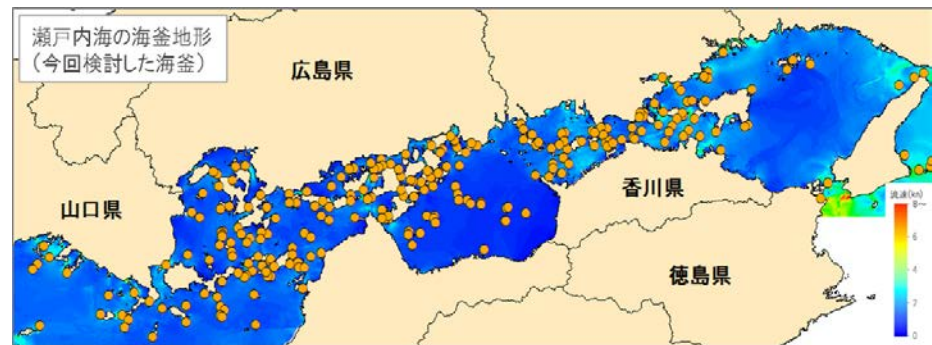
1. はじめに

瀬戸内海には海釜と称される楕円形，円形，三日月形等の形状の海底の窪地が数多く存在している．この数多くの海釜に関して，八島

(1994)は膨大な資料を用い，その成因や形成時期等について考察し，潮流の流速と海底の侵食状況の間には比較的明瞭な対応関係が見られることから，潮流による侵食が海釜形成の主たる原因であると結論づけた．

しかし，潮流がごく弱い海域にも海釜は存在しており，潮流以外にも海釜の形成の要因があると考えられる．本発表では，そうした要因の一つとし

て，津波による強い流れがあるのではないかと予想し，考察した結果について紹介する．



2. 方法

瀬戸内海に散在する海釜から八島(1994)に提示された海釜を基礎とした，およそ250の海釜を選び，海釜位置における潮流と津波の流れ各々の最大流速を求め，それぞれの流れの海釜形成への寄与について検討した．

潮流の最大流速計算には日本水路協会が2000年度から3年間実施した潮汐シミュレーションの成果を利用し，津波の最大流速計算には南海トラフ地震の想定津波断層モデルを用いて海洋情報部で実施した津波シミュレーションの成果を利用した．

3. 結果と課題

津波の最大流速と海釜の深さとの間には全般的な相関関係は見られず，このことから海釜形成への津波の寄与の度合いは小さいと判断した．しかし，少数ではあるが，津波によって形成された可能性の高い海釜も見いだされた．そうした海釜が存在する海域では共振により固有振動が励起され，強い流れが発生する状況が12時間以上も継続することが解った．

今回は主に八島(1994)が採り上げた海釜を対象として考察を進めたが，マルチビーム測深器などを用いた測量の範囲が広がれば，詳細な海底地形データが得られ，更に多数の海釜が発見されることが期待出来る．今後はそうした詳細な海底地形データを用いて，津波が海底に残した痕跡を探る必要がある．